

文化財  
NEWS速報!

## 伝統工芸技術記録映像「伝統に生きる」最新作完成!

—平成24年度は木版画摺の松崎啓三郎さん—



写真3 版木の「見当」



写真2 羽部分の拡大

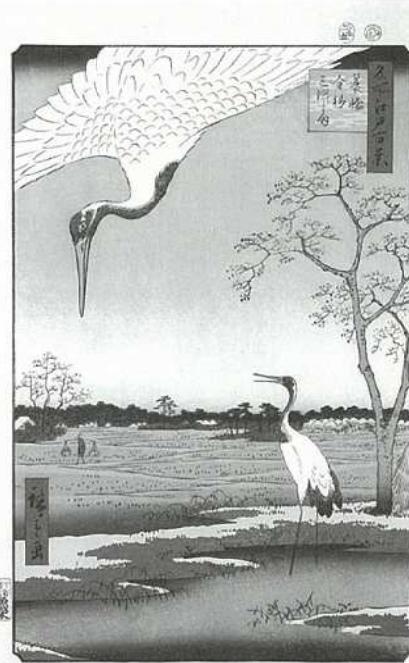


写真1 名所江戸百景 简輪金杉三河しま



写真4 松崎啓三郎さん

# 荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会  
荒川ふるさと文化館  
荒川区南千住6-63-1  
TEL 03(3807)9234  
登録(24)0040号-02

**木版画摺の技** この浮世絵（写真1）は、荒川区民にはお馴染み、大きく翼を広げて湿地に飛来する鶴が印象的な「名所江戸百景 简輪金杉三河しま」です。しかし、江戸時代の摺りではありません。実は江戸時代に摺られた浮世絵（当館蔵）を原版にして、つい先ごろ摺られた復刻版です。木版画摺師・松崎啓三郎さん（写真4、区指定無形文化財保持者）の手によるものです。摺るのに用いた版木も区内の彫師・関岡裕介さんが彫ったものです。多色摺りの木版画は、輪郭線を彫った墨板と、複数枚に彫り分けられた色板という版木を用い、色ごとに摺り重ねて仕上げられます。繊細な色づかいは、松崎さんの長年の経験に基づき、絵具を調合することにより再現されています。

**ぼかし** 絵の一一番上部の空の切れ目の闇や、沼の水面の岸に沿った影の部分など、濃い色から徐々に薄い色になっている部分があります。これは、ぼかしという技法で、版木の上で絵具を伸ばす際の水の含ませ方や、版木での絵具の伸び方など、絶妙な加減が必要で、ぼかし具合は摺師の腕ひとつにかかることがあります。ぼかしを入れる面が広くなるほど、均等の幅でぼかし具合を揃えることは難しく、松崎さんの精密なぼかしは、まさに熟練の成せる技といえます。

**空摺り** 二羽の鶴の羽の白地部分は、近づいて見ると、なんと一枚一枚の羽枝や首の毛の線が浮きあがって見えます（写真2）。これは、空摺りという技法によるものです。版木に彫りこまれた図柄を、強く押し付けるように摺ることで、図柄の凹凸を和紙に写し取っています。このような浮世絵の半立体的な視覚効果までも見事に再現されているのです。

**正確さとスピード** 作品を見ただけではわからない技もあります。正確さとスピードです。ズレなく摺るのは摺師の基本ですが、松崎さん曰く、木版画摺の仕事は、一つの注文につき、手摺りで百枚単位の量産をするので、素早く、何枚でも正確な摺りあがりでこなすことが大事なのだそうです。秘訣は各版木の左下の直角と左辺一ヶ所にある「見当」という目印にあります（写真3の○部分）。和紙の一角と一辺を合わせるために各版木についており、紙を合わせる「見当」にするのです。しかし、版木は温湿度によって日々刻々、微妙な伸縮が生じるので、試し摺りで、版木のどこに和紙を置けば図柄がピタリと重なるかを見極め、見当を微調整することで、これを可能にしているのです。

荒川区教育委員会では区指定無形文化財保持者の製作工程を映像に記録し、その作品を購入することで、後世に技術を伝える取り組みをしています。今年度は松崎さんの木版画摺の技を映像化しました。区内図書館でDVDを貸出しおり、当館1階郷土学習室で鑑賞できます。ぜひご覧下さい。

（澤田善明）

職人の道具にはさまざまな種類があるが、かつて象牙職人の使う彫刻刀によつて流派があつたことを存じだろうか。明治初期、牙彫と呼ばれた象牙の彫物は、海外の輸出品として人気があり、数多くの職人がいたという。後に紹介するように、当時、現荒川区域にもその職人が住んでいた。この明治期の職人たちについて、彫刻家の高村光雲は『幕末維新懷古談』(岩波書店、平成 7 年。初版は昭和 4 年)「一九二九」の中で触れている。

**明治時代初期の象牙細工** 光雲によると、明治 8、9 年(一八七五、七六)頃、牙彫はさほど流行つていなかつた。明治 10 年の内国勧業博覧会に出品された象牙彫りの作品はかなりの数であつたが、小さなものばかりで、図柄も貿易商人の好みを中心にならして作られていた。元々、象牙の根付は、三味線の撥の残材で作られており、素材自体が小さかつたのである。しかし、わずか 4 年後の明治 14 年の博覧会では、海外での流行もあつて、会場は象牙一色になつた。作品は小さいものだけでなく、7、8 寸(約 21~24 cm)から 1 尺(約 30 cm)ぐらいの大きさがあり、象牙の木地いっぽいに作られ、その出来栄えを競い合つていた。輸出が盛んな時代であった。

**牙彫の流派**さて、この当時、輸出品の彫刻のはほとんどが牙彫といつて隆盛に向かえる中、比較的上等なものを取り扱う人たちと、出来栄えよりも手間(賃)にさえなればよいという人たちの 2 つに分かれたそうだ。前者は、自分で意匠を考えて作ることが多い、いわゆる「先生」で、商人の方でも一目置いており、「先生派(技術派)」と呼ばれた。この中には、髑髏をモチーフとした根付で有名な旭玉山、牙彫の世界では第一人者である石川光明、島村俊明などがいた。後者は、貿易商人からの受注で、売り



### 明治時代の象牙職人

一方、右刃は伝統的技法であるといわれる。『東京名工鑑』(以下、『名工鑑』と略)には、職人が左右どちらの刃で彫るか流派や得意な作品などが掲載されており、右刃か左刃か、はたまた両方使うかは、牙彫の世界ではそれぞれこだわりがあったことが窺える。とはいっても、右刃、左右刃と見えることから、右刃を扱うものだけが「名工」と呼ばれていたわけではないこともわかる。現に、「先生派」にいた石川は左刃を扱うと見える。

あらかわに住んでいた象牙職人 また、『名工鑑』からは、当時、現荒川区域に在住していた職人は、前述の石川、鵜澤といつた人物と関わりがあつた。石川は先生派で、牙彫や木彫の世界で、指導的役割を果たし、明治 24 年からは東京美術学校で後進を育てた。彼らの師匠は、根岸辺りに住んでいた名工の一人菊川太左衛門である。中島は、

日暮里に建つ左刃の碑 牙彫は、左刃の彫刻刀とそれを使つた技法が導入されたことで、革新的に進歩し、数多く量産できるようになつた。この左刃の記念碑が西日暮里三丁目の延命寺境内に建つている。「左刃式派記念之碑」は、記念碑であると同時に、左刃の祖といわれる大坂の徳蔵と、江戸でその技術を教わった山田潮月(正接)の慰靈碑でもある(『荒川ふるさと文化館だより』23 号参照)。この碑を立てたのが谷中派であり、裏面には山田の弟子、鵜澤春月が由来を記している。

一方、右刃は伝統的技法であるといわれる。『東京名工鑑』(以下、『名工鑑』と略)には、職人が左右どちらの刃で彫るか流派や得意な作品などが掲載されている。牙彫の世界ではそれぞれこだわりがあったことが窺える。とはいっても、右刃、左右刃と見えることから、右刃を扱うものだけが「名工」と呼ばれていたわけではないこともわかる。現に、「先生派」にいた石川は左刃を扱うと見える。

あらかわに住んでいた象牙職人 また、『名工鑑』からは、当時、現荒川区域に在住していた職人は、前述の石川、鵜澤といつた人物と関わりがあつた。石川は先生派で、牙彫や木彫の世界で、指導的役割を果たし、明治 24 年からは東京美術学校で後進を育てた。彼らの師匠は、根岸辺りに住んでいた名工の一人菊川太左衛門である。中島は、

図『東京名工鑑』にみるあらかわの先生派・谷中派職人系図	
先生派(技術派)	菊川太左衛門(正光)(政光) 中島寅吉(現東日暮里在住)
(現台東区根岸在住)	石川光明(帝室技芸員・東京美術学校教授)
谷中派(左刃)	山田潮月(正接) 鵜澤春月 井上菊太郎(江南) (現東日暮里在住)

## 企画展「ぼれ話⑨」

### 日暮里の山車人形・ 鎮西八郎源為朝の高欄



写真1 高欄



写真2 『大東京展覧会図録』



写真3 梶の葉



写真4 笹竜胆

去る 11 月 10 日～12 月 9 日に開催した企画展「山車人形が街をゆく」では、計 7 体の山車人形が来館者のみなさんをお迎えした。この中に、大きな弓を手にした日暮里の山車人形・鎮西八郎源為朝（以下、山車人形・為朝、と略）が展示されていたことをご記憶の方も少なくないに違いない。

山車人形・為朝は、嘉永三年（一八五〇）頃に、新堀村が古川長延に依頼して作られたと考えられており、以後、祭礼の際に、山車に乗せられ曳かれた。近代になり電線が架設されると、飾られるだけになって、大正三年（一九一四）～昭和七年（一九三二）の間に諏方神社に奉納された。戦後は長く神輿庫にしまわっていたが、平成元年、地元有志により修復され、神楽殿に飾られるようになった。今日では、8 月末の祭礼期間中や、正月三箇日、毎月 1 日には、神楽殿の戸が開け放たれ、公開されている。

ところで、この幕や高欄は、本当に山車人形・為朝のものなのだろうか。幕の方は、昭和七年に上野松坂屋で開催された大東京展覧会で展示され際の写真から一目瞭然である（写真2）。だが、高欄の方は、單純に判断することはできない。諏方神社の、しかも同じ箱に入っていることから、この高欄が、山車人形・為朝の乗せられていた山車のものである可能性は高いとはいえ、別のものを同じ箱に入れたことも、可能性としては想定できるためである。

○ ○

そこでもう少し観察してみることにした。すると、高欄そのものに、山車人形・為朝のものであることを示唆するマークがついていた。

さて、企画展の後、山車の高欄らしきものが入った長持があることを諏方神社から教えていただいた。早速調査に赴くと、鶴や「諏方」「大祭」の文字が刺繡された幕 4 枚や、波が岩に荒々しくぶつかり、波しぶきを上げる構図が刺繡された幕 3 枚などが入っていた。いずれも豪華な幕である。

さらに、高欄も入っていた（写真1）。組み立ててみると、高欄の内側は、凡そ  $120 \times 140$  cm。これは越生町上町に現存している、かつて同じ諏方神社祭礼で曳かれた旧谷中三崎町の山車の高欄とほぼ同規模であった。

ところで、この幕や高欄は、本当に山車人形・為朝のものなのだろうか。幕の方は、昭和七年に上野松坂屋で開催された大東京展覧会で展示され際の写真から一目瞭然である（写真2）。だが、高欄の方は、

その① 写真3は、高欄先端の飾金具で、梶の葉紋が打ち出されている。この紋は、諏方神社の神紋である。よって、この高欄が、諏方神社や同社祭礼に関するものである可能性は高いと考えられる。

その② 写真4は、笹竜胆の紋である。江戸時代を通じて清相源氏の紋と考えられていた。実

在の源為朝は、源氏の棟梁、源為義の子で、系図上、鎌倉幕府の初代將軍源頼朝の叔父に当たる。したがって、江戸時代に製作されたと考えられる山車人形・源為朝の紋として、

笹竜胆が用いられていても全く不思議ではない。

両紋が同じ高欄についており、しかもその高欄が、山車人形・為朝の幕とともに、諏方神社に保存されている、という事実。これらが偶然重なりあう可能性は極めて低いだろう。よって、この高欄も山車人形・為朝の山車の高欄と判断した次第である。

そして、今年度、山車人形・為朝は、ここに紹介した幕や高欄とともに、荒川区有形民俗文化財に登録された。次の「速報！ あらかわの文化財展」において、再び当館に展示される予定である。

（亀川泰照）

あらわし  
タイヒトのスルス

## 談林派歴代の句碑をめぐる俳人たち

日ぐらしの里を広めた碑 四季を通じて行楽客の絶えない日ぐらしの里（西日暮里三丁目）には、注目の文学碑がいくつも置かれた。文化5年（一八〇八）、花見寺修性院に建立された日野大納言資枝の「たれとなく 咲ききそふ花のかげとひて げに日ぐらしの里ぞにぎはふ」の歌碑（現存せず）に代表されるように、有名人の碑を目当てに訪れる客も多かつた

という。資枝は大変優れた歌人で、幾人の大名が和歌の指南を受けたがるほどで、江戸にもその名は知れわたっていた。やはり当代一の歌人の碑は、とても評判で、「正面打事無用」という拓本禁止の木札が建てられていたそうだ（「一話一言」卷21）。江戸で人気の狂歌師、大田南畠も、資枝の歌碑が気になつたらしく、どこからか拓本を入手していた。資枝の和歌があまりに直截的だったためか、南畠は「なべての地名よろしきも縉紳家の口をへざれば名所にはならざるよしなれど、此のうたにて勝地とよばれんも口おしかるべし（総じて良い地名であっても、身分の高い人が声にしなければ名所にはならないよう



写真1 談林派歴代の句碑 (区指定有形文化財の一つ「梅翁花尊碑」)

だ。このような歌で景勝地だと評判になるなんて、日ぐらしの里は良い場所だけに悔しいことだ」と酷評している（「一話一言」卷20）。

梅翁の句碑が墓か 南畠のお氣に入りは、仁王門の寺、養福寺の境内にあった。寛政4年（一七九二）に建てられた俗に「梅翁花尊碑」とか「花樽の碑」と呼ばれる西山宗因の句碑である（写真1。区指定有形文化財「談林派歴代の句碑」の一つ）。宗因（一六〇五～八二）は、大坂天満宮の連歌所宗匠を務め、談林俳諧の祖と認められていた人物だ。梅を殊の外愛したことから「梅翁」とも称し、江戸時代前期の連歌・誹諧の世界では、知る人ぞ知る有名人だった。

南畠は、この句碑を「谷中宗因墓」と読んでいる。南畠の記述によれば、近頃、養福寺境内に、大坂の宗因の墓が建てられた。ここには、いつも施錠してあつて入ることができなかつたが、養福寺の僧に頼んで詣でることができた。傍らにはたくさんの梅が植えられていたと書き留められている（「一話一言」卷16）。ちなみに、「江戸名所図会」の日暮里惣圖には「梅翁塚」と注記された石碑が描かれており、これも墓のごとき紹介がなされている。

梅のまつりと句碑 談林派歴代の句碑は、談林派二祖・井原西鶴の百回忌を記念して、八代目を自称する谷素外が建立した句碑である。何故、この句碑が墓のような印象を持たれたのであろうか？

「誹諧百回鶴乃跡」（寛政4年。早稲田大学図書館蔵）や「誹諧梅のまつり」（文政元年（一八一八）。東京国立博物館蔵）によると、享保年間（一七一六年（一七八一）、梅の周りに瑞垣を廻らせて「梅野

天満宮礼拝場」を再興させた。ここに談林派の祖宗の「江戸をもつて鑑とすなり花に樽」をはじめとする談林派の先哲が認めた発句を刻んだ碑を立て、人々が集まつて、追悼会を催したそうだ。

石碑の周りが瑞垣でめぐらされていれば、碑の形状から見て、南畠らがここを墓所と誤認しても止むをえまい。しかも、ここは宗因ら談林派歴代を偲ぶ場であつたのだから。



写真2 「梅花佛」の碑

ところで、談林派歴代の句碑の傍らに「梅花佛」の文字を刻んだ円形の石が置かれている（写真2）。これは、芭蕉十哲の各務支考の墓（岐阜市）を模した石塔で、大垣・桑名・深川等、松尾芭蕉ゆかりの地にある。松尾芭蕉が桃青を名乗つていた若いころ、宗因の談林俳諧に影響を受けたことを知つてのことか、将又、花樽の碑の「鑑」の文字に反応したものか、設置の経過は不明である。

しかし、日ぐらしの里にも、間接的ではあるが、芭蕉につながる石造物が確認されたことになろう。

（野尻かおる）

【参考文献】「一話一言」（『日本隨筆大成』別巻2・3）、磯ヶ谷紫江『日暮里養福寺と梅翁花尊碑』、宮山幹生「宗因終焉の地と「梅翁花樽碑」について」（『夜豆志呂 八代の郷土史』70号）



写真 七夕飾り（昭和 30 年代初期）[木島一登氏蔵]

七夕飾りは、昭和 29 年から始まりました。おぐぎんざ商店街の七夕まつりは、昭和 37 年まで開催されました。当初は小規模でしたが、年々規模が拡大していき、七夕飾りの優秀作品を決める七夕コンクールも開催され、おおいに盛り上がっていました。

【参考文献】『尾久の民俗』、安城市歴史博物館「日本の三大七夕」、八木橋伸浩『都市周縁の考現学』、おぐぎんざ商店街振興組合『五十年のあゆみ』、『目で見る荒川区 50 年のあゆみ』

七夕に込められた願い 昭和 20 年代後半、日本の景気が徐々に上向きになつていく時期に、七夕行事は全国的にブームとなつて、各地の商店街でおこなわれていました。その多くは商店街の活性化や商業振興を目的としたものでした。

おぐぎんざ商店街の七夕まつりを始めた経緯を聞いてみると、地域の活性化や商業振興のために、何かいいイベントはないかと模索していた時に、七夕まつりが挙がつたそうです。おぐぎんざ商店街の七夕に込められた願いも、商売繁盛、ひいては地域の活性化であったといえそうです。商店街の人びとに行つたそうです。

願いのゆくえ 現在のおぐぎんざ商店街では、七夕まつりは開催していません。おぐぎんざ商店街が発行した『五十年のあゆみ』によると、消防や交通の規制などを理由として昭和 37 年には終わつたそうです。しかし、七夕に込められた願いは、少しも薄れていません。七夕まつりが姿を消した後も、阿波踊り大会やのど自慢大会、現在では「納涼バカ市」など、形をかえて地域を活気つける行事は続けられています。今回確認できたのは尾久の七夕まつりですが、他の地域でも開催されていたかもしれませんし、現在でもおこなつている商店街があるかもしれません。もし、区内の街角で七夕飾りを見かけたらご一報ください。

（宮部俊周）

と過ぎゆく季節へのたより VII  
おぐぎんざ商店街の地域おこし  
／尾久の七夕まつり／

まずは、上段の写真（写真）をご覧ください。この写真は、昭和 30 年代初期のおぐぎんざ商店街（東尾久 4 丁目）で撮影されたものです。商店街の空にはたくさんの飾りが見えます。写真の手前中央、洋

服店とハキモノ店の間に見える飾りは、右側が宇宙ロケット。左側の球状の物体は、日本列島の形が確認できるので、地球を表現したものであることがわかります。日本列島部分の形は精巧に再現されており、関東地方の辺りをよく見てみると、荒川区のある東京の位置に二重丸の印が付けられていて、細部までよく作り込まれています。大きさも隣接する看板や窓から推測するとかなり大きいことが窺えます。写真の撮影時期と近い昭和 32 年（一九五七）には、世界初の人工衛星スプートニク 1 号の打ち上げが成功し、宇宙開発競争が始まりました。その時事的な話題に由来して作製された可能性があります。また、写真の奥の方にはハチマキをしたタコが見えます。これは理髪店と魚屋の間に飾られています。他の写真には台に乗る眼鏡をかけた人形や、ゑびすや食堂の前に飾られた恵比寿様などが確認できます。お店の業種や名前に由来するような飾りも飾られていたようです。

さて、これらの飾りの正体ですが、実は七夕まつりの飾りです。よく見てみると写真左側にある地球の裏には笹竹があるのがわかります。七夕飾りといえば、願い事を書いた短冊や星飾などが思い浮かびますが、この当時、おぐぎんざ商店街では、写真のように個性的な飾りが使われています。

七夕まつりのはじまり おぐぎんざ商店街

の七夕まつりが始まつたのは昭和 29 年から



東日本大震災で被害をうけた、南千住延命寺の小塚原の首切地蔵（区指定有形文化財〈歴史資料〉）の修復工事が終了しました。11月23日に開眼供養式が行われ、お披露目されました。

## 平成24年度の文化館・文化財の動向

- 4月1日** 平成23年度の区登録・指定文化財を区報にて紹介。
- 4月21日～5月27日** 「速報！あらかわの文財展」開催。平成23年度の区登録・指定文化財や、新たに収集した資料を紹介。
- 5月28日** 第1回文化財保護審議会開催。平成24年度区登録・指定文化財諮問。文化財保護審議会委員石塚昭一郎氏委嘱（再任）。
- 6月2日** 史跡めぐり「三河島の山車人形を見にいこう2012」実施。区指定有形民俗文化財の旧三河島山車人形・稻田姫や熊坂長範などを見学。
- 7月6日～8日** 荒川区制施行80周年記念事業 第33回「あらかわの伝統技術展」開催。伝統工芸の職人さん、68名出演。
- 7月17日～8月24日** 延命寺（南千住二丁目）の小塚原の首切地蔵（区指定有形文化財）の修復工事を実施。
- 8月8日** 養福寺（西日暮里三丁目）の木造二天王立像（区指定有形文化財）を修復作業のため撤去。
- 8月18日** 文化財保護審議会臨時委員 是澤博昭氏（大妻女子大学准教授）諮問案件である日暮里山車人形・鎮西八郎源為朝を調査。
- 8月22日** 文化財保護審議会合同部会開催。
- 9月30日** 史跡めぐり「おぐのほそ道と観月会」実施。悪天候のため満光寺（東尾久三丁目）で観月会（ミニ講演会・句会）のみを開催。
- 10月1日** 石塚昭一郎氏（区文化財保護審議会委員）が「東京都功労者（文化功勞）」受賞。
- 10月11日～11月27日** 学校職人教室実施。伝統工芸の職人さん、区内全24の小学校で上演。
- 11月1日** 文化財保護審議会合同部会開催。
- 11月8日** 延命寺（南千住二丁目）の史跡説明板「小塚原刑場跡と小塚原の首切地蔵」と指定文化財標柱「小塚原の首切地蔵」を設置。
- 11月10日～12月9日** 区制施行80周年関連事業企画展「山車人形が街をゆく」開催。区内に現存する4体と区外に譲られていつた3体の山車人形を中心にして展示・紹介。
- 11月16日** 前森英世氏（区指定無形文化財保持者・提灯文字）が「東京都優秀技能者（東京マイスター）」受賞。
- 12月26日** 伝統芸能等記録ビデオ制作「お諏方さまのまつり～諏方神社の年中行事と江戸の里神楽～」粗編集版完成。

### 文化館でお買いもの



平成24年度企画展「山車人形が街をゆく」で紹介した山車人形の古写真を絵葉書にしました。常設展示室入口の受付で購入できます。  
100円（5枚組）

- 7月21日～8月31日** 夏休み子ども博物館にいこう！開催。「あらかわ職人道場」、「リトル学芸員」、「勾玉づくり」、「俳句をつくろう」、「親子で楽しむ展示解説」、「あらかわ調べもの相談室」を実施。
- 7月21日～9月2日** 荒川区文化財保護条例30周年記念企画展「再発見！あらかわの匠の仕事－伝統工芸品展－」開催。

- 1月～3月** 第4期区伝統工芸技術継承者育成支援事業短期現場実習（ステップ1）開始。
- 1月9日** 第2回文化財保護審議会開催（答申案）。
- 1月23日** 第3回文化財保護審議会開催（答申案）。
- 2月8日** 平成24年度区登録・指定文化財告示（『指定』）無形文化財（工芸技術）刷毛・齋藤正一郎、記念物（史跡）富士塚（素盞雄神社境内）、（登録）無形文化財（工芸技術）鍛金・富士豊二、有形民俗文化財 日暮里山車人形・鎮西八郎源為朝（諏方神社所蔵）、《指定文化財の修理保存について》三河島山車人形・稻田姫）。

- 3月2日** 奥の細道矢立初めの地子ども俳句相撲大会開催。
- 3月8日** 伝統工芸技術記録映像「伝統に生きる」（区指定無形文化財、木版画摺・松崎啓三郎）完成。また同氏の作品を購入。
- 3月21日** 素盞雄神社（南千住六丁目）の指定文化財標柱「松尾芭蕉の碑」を改修。
- 3月28日** 史跡説明板「道灌山」を西日暮里四丁目に新設。
- 3月29日** 青雲寺（西日暮里三丁目）「滝沢馬琴筆塚の碑」を改修。